

# 古典日本語の名詞修飾節再訪

—連体節・準体節・主名詞内在関係節・形状性名詞句—

国立国語研究所・機関拠点型基幹研究プロジェクト

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」

文法研究班 「名詞修飾構文の対照研究」研究発表会

平成 28 年 11 月 19 日 (9:30-18:00)

名古屋大学 東山キャンパス・全学教育棟 4 階 406 室

金水敏 (大阪大学大学院文学研究科)

## 1. はじめに

- 中古文献、中世前期文献における連体形述語の機能を、名詞句系と非名詞句系に分けて、統計的観点から機能分布を確認する。
- 非名詞句系においては、「係り結びの衰退」「終止形・連体形の合流」の過程の一端を示す。
- 名詞句系においては、連体修飾節・準体節他のヴァリエーションを示すとともに、通時変化の一端を示す。

## 2. 資料

- 国立国語研究所「日本語歴史コーパス」平安時代編のうち「土佐日記」および、鎌倉時代編のうち「宇治拾遺物語」を用いる。
- それぞれ底本は下記の通り。  
土佐日記：菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久（校注・訳者）『土佐日記 蜻蛉日記』新編 日本古典文学全集 13、小学館、1995 年。（以下、「土佐」とする）。成立は 934 年。  
宇治拾遺物語：小林保治・増古和子（校注・訳者）『宇治拾遺物語』新編 日本古典文学全集 50、小学館、1996 年。（以下、「宇治」とする）。成立は 13 世紀前半。  
および上記 2 冊の Japan Knowledge 版。
- ただし、宇治拾遺物語は、土佐日記とだいたい言語量をそろえるため、巻第一・一～十七を調査対象とする。
- 検索には、国立国語研究所提供の検索エンジン「中納言」を用いる。

## 3. 連体形の諸用法の統計量

- 土佐：連体形 550 例、終止形 380 例  
宇治：連体形 506 例、終止形 293 例
- 土佐内訳：

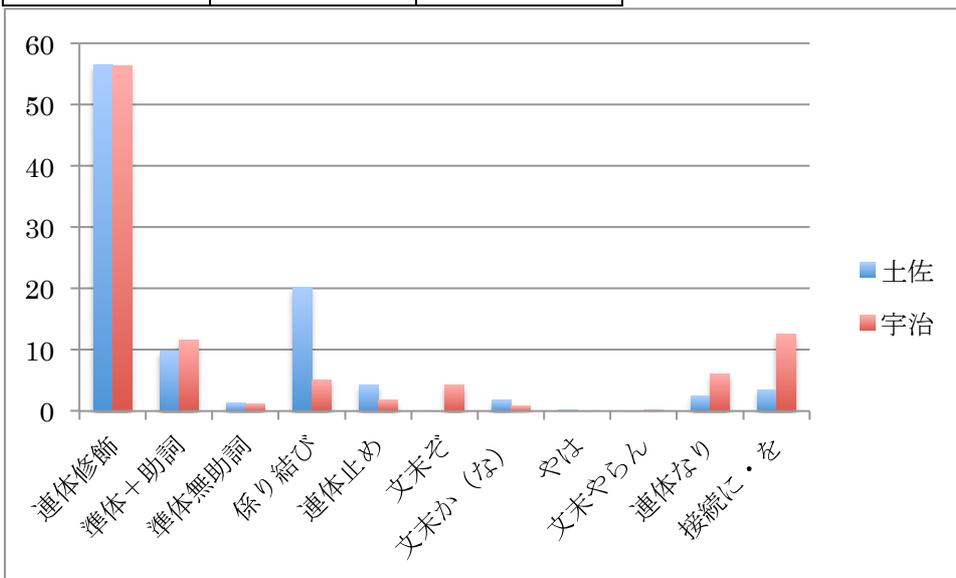
用法	実数	%
連体修飾	311	56.5
準体＋助詞	54	9.8
準体無助詞	7	1.3
係り結び	111	20.2
連体止め	23	4.2
かな	10	1.8
やは	1	0.2
連体なり	14	2.5
接続に・を	19	3.5
計	550	

● 宇治内訳：

用法	実数	%
連体修飾	285	56.3
準体＋助詞	58	11.5
準体無助詞	6	1.2
係り結び	26	5.1
連体止め	9	1.8
文末ぞ	22	4.3
文末か(な)	4	0.8
文末やらん	1	0.2
なり	31	6.1
接続に・を	64	12.6
	506	

● 両文献の百分率による比較

	土佐	宇治
連体修飾	56.5	56.3
準体+助詞	9.8	11.5
準体無助詞	1.3	1.2
係り結び	20.2	5.1
連体止め	4.2	1.8
文末ぞ	0	4.3
文末か(な)	1.8	0.8
やは	0.2	0
文末やらん	0	0.2
連体なり	2.5	6.1
接続に・を	3.5	12.6



#### 4. 名詞句系の各用法

##### 4.1 連体修飾節

内の関係：

- (1) この人々ぞ、志ある人なりける。(土佐)
- (2) 京の近づく喜びのあまりに、ある童のよめる歌、#祈り来る風間と思ふをあやなくもかもめさへだに波と見ゆらむ(土佐)
- (3) それはさることにて、花こそといふ文字こそ女の童などの名にしつべけれ」とて、(宇治・巻第一・十)
- (4) 大納言より後の事書き入れたる本もあるにこそ。(宇治・序)

外の関係：

(5) 船の上ること、いとかたし。(土佐)

(6) たびたび土器始りて、宗との鬼殊の外に酔ひたる様なり。(宇治・巻第一・三)

その他：

(7) かくあるを見つつ漕ぎ行くまにまに、山も海もみな暮れ、夜更けて、西東も見えずして(土佐)

(8) 人にも心ざし、また我も食ひなどして年比過ぐる程に、その里にとりて宗とある者の夢に、(宇治・巻第一・二)

## 4.2 準体

モノ準体：

(9) かれこれ、知る知らぬ、送りす。(土佐)

(10) 大納言の物語にもれたるを拾ひ集め、またその後の事など書き集めたるなるべし。(宇治・序)

コトガラ準体：

(11) 生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ(土佐)

(12) 雨風はしたなくて帰るに及ばで、山の中に心にもあらずとまりぬ。(宇治・巻第一・三)

**主部内在節** → **同格準体**？

(13) ふむとき、これもちが船の遅れたりし、奈良志津より室津に来ぬ。(土佐)

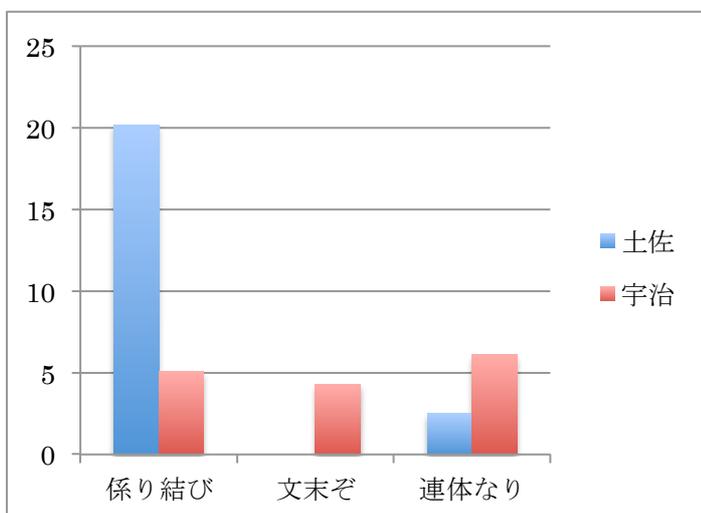
(14) さて小侍の十二三ばかりなるがあるを召し出でて、(宇治・巻第一・六)

※分類は必ずしも容易ではなく、本質的に多様な解釈を許す。

## 5. 非名詞句系の各用法

### 5.1 係り結びとその衰退

- 土佐から宇治にかけて、係り結びが減少しているが、宇治における、文末に「ぞ」を持つ文の多用 (cf. 山田 2010)、および「連体なり」構文の増加が係り結び構文の機能を補完している可能性がある。



- (15) 「くは、これが中にのたまふ金はあるぞ。#あけて少しづつ取り出でて使ひ給へ」と教へて出でて往にけり。(宇治・巻第一・八)
- (16) 「などかくは問ひ給ふぞ。肥前国ぞかし」といへば、「あさましきわざかな」と思ひて、(宇治・巻第一・十七)
- (17) 何を証拠にてかうはのたまふぞ。わ主が取りて、この童に負ほするなり」といふ。(宇治・巻第一・十五)
- (18) 「この殿は大方歌の有様知り給はぬにこそ。かかる人の撰集承りておはするはあさましき事かな。……」(宇治・巻第一・十)

## 5.2 連体止め

- 係り結びではなく、名詞句でもないが、連体形で終わる文を指す。説明的であったり、詠嘆的であったりする。
  - 土佐では統計上、23 例あることになっているが、このうち 19 例は、次のような歌の前の解説で、「～詠める」は「～詠める (歌)」というモノ準体句相当とも解釈できる (これを「詞書き文」と呼んでおく)。
- (19) また、ある人のよめる、吹く風の絶えぬ限りし立ち来れば波路はいとどはるけかりけり (土佐)
- 詞書き文ではない連体止めは、土佐 4 例、宇治 9 例で、増えてはいる。
- (20) 海賊追ふ、といへば、夜中ばかりより船を出だして漕ぎ来る。(土佐)
- (21) この聳の君、屏風を立てまはして寝たりける。(宇治・巻第一・十四)

## 6. 総括

- 土佐と宇治の連体形の用法では、名詞句系の連体修飾節はあまり変化が見られない。各時代を通じて安定しているのではないか。
- 準体句の用法では、ここでは述べなかったが、格助詞「が」を伴う主語表示など宇治において発達している語法が見られる。
- 準体句の用法は、モノ準体、コトガラ準体、主部内在節、連体止め文などの分類観点を立てることはできるが、必ずしも単独の用法に固定化できるものではなく、多面性 (ゆらぎ) をはらんでいる (cf. 柴谷 2016 等、nominalization の議論参照)。
- 終止形と連体形の合流への流れとして、連体止め文は確かに増加しているが、「～ぞ」の増加には着目すべきである。係り結びの減少を「～ぞ」や連体ナリ構文が補っていることにも注意。

## 参考文献

石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店。

金水 敏 (2011) 「第 3 章 統語論」金水 敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子 (著) 『文法史』シリーズ 日本語史、3、岩波書店, pp. 77-166.

Kinsui, Satoshi (2015) "On Kakari-musubi and Focus in Interrogative Sentences in Old Japanese (上代日本語の疑問文の係り結びと焦点について)," International Workshop "Kakarimusubi from a Comparative Perspective", September 5-6, 2015 at NINJAL.

柴谷 方良 (2016) "What can modify nouns?" 国立国語研究所・機関拠点型基幹研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾構文の対照研究」研究発表会、2016年7月9日於神戸大学.

野村剛史 (2010) 『話し言葉の日本史』吉川弘文館.

山田昌裕 (2010) 『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房.